［研究ノート］

ソーシャル・キャピタルの概念と政策的含意

古　河　幹　夫

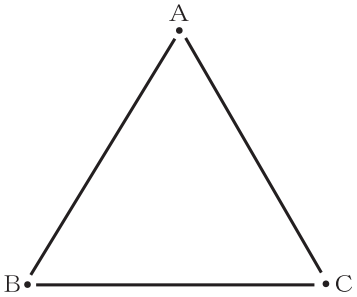
ソーシャル・キャピタル（social capital）に関する研究が，主には英語圏であったが，それにとどまらず社会科学領域できわめて増大し注目を集めつつある。それをテーマにした論文数は1990年代末から急拡大している。日本語では「人間関係資本」と訳されるように，人の社会関係を資本の一種として捉えようとするものである。人間のもつ能力等を資本の一種として把握する点ではベッカー（Becker）による人的資本理論がすでにあり，経済学において決して馴染のない研究対象ではなかった。とはいえ，社会関係を独立した要因として分析することに関しては，いわば「経済学者が見落としていた変数（missing variable）であった」[1]。

人的資本との違いについてはコールマン（Coleman）の把握が簡潔に示している（図表１）。コールマンはダイヤモンドを扱うユダヤ人商人を事例としてあげており，商品としてのダイヤモンドの質を保証するさい，詐欺や偽物の発生を考慮して契約や保証の費用が高くなりがちな状況にありながらも，ユダヤ人という関係性がその費用を抑え信頼関係にもとづく取引を可能にし，競争上の有利を提供していると説明している。このような現象は，契約や取引費用の問題として経済学の守備範囲であり，とくに新制度派経済学の主要なテーマでもあった。したがって経済学者のなかには，ソーシャル・キャピタルという概念の設定に批判的なものもいる。アロー

1　Halpern（2005），p.3

（Arrow）は，およそ「資本」という概念が適用されるためには，①時間的に一定期間存続すること，②将来の便益と引き替えに現在における何らかの犠牲があること，③譲渡可能であること，の条件をあげ，社会的な人間関係に対して「資本」の概念を用いることは適切でないとしている[2]。

図表１



A,B,Cの各点は「人的資本」を表し，それぞれの間の直線が
「ソーシャル・キャピタル」を表す。Coleman(1990) p.305

ソーシャル・キャピタルについての議論を学術的な領域から広く政治社会的な討論のテーマとして浮上させたのは，パットナム（Putnam）の著書『孤独なボーリング』，そして世界銀行に関与する専門家による争点化であろう。パットナムは，米国社会で1960～70年代と1990年代後半を比較すると，ソーシャル・キャピタルに該当する様々な指標において，大幅な低下すなわちソーシャル・キャピタルの衰退がみられるとした。すなわち，選挙活動への市民参加率，自発的結社の加入率，PTA の会員数，地域のクラブへの参加，労働組合加入率，専門職組織への加入率，社交的訪問の割合，等々である。そして，その要因として，共稼ぎ家庭の増大等による時間的・金銭的な余裕の減少（全体の10％を説明），郊外化や通勤とスプロール化現象（全体の10％を説明），テレビに代表される屋内娯楽による

2　Dasgupta & Serageldin（2000）に所収の論文。

余暇時間の私事化（全体の25%を説明），世代的変化すなわち第二次世界大戦後に壮年世代となった人々は，市民的関与が多いという特徴をもっていたが，彼らが高齢化し別の特徴を有する若い世代が壮年となったことによるもの，と分析している。

パットナムの著作の影響はとくに米国社会において大きかったが，批判もある。自発的結社・団体への加入率低下に関連してだが，環境保護関連の団体やブッククラブなど会員登録のみ（会費支払義務は存在する場合と存在しない場合の両方ある）の加入率では増大しているデータもあり，自発的団体への加入の内実を問わなければならないというものである。また，1960～70年代から1990年代のほぼ同時期に，米国，イギリス，オーストラリアなど英語圏では同様の傾向が観察されるものの，ドイツや日本ではそれと異なる傾向が観察され，つまりソーシャル・キャピタルの衰退は観察されず，先進工業国一般に妥当する現象とは言えない，等々である[3]。

開発問題の分析において，資本ストックの充実が持続可能な発展を左右するにもかかわらず，資本ストックのなかでソーシャル・キャピタルへの注目が従来手薄だったが，世界銀行等の国際機関に関与する研究者のあいだで関心を集めるにつれ，ソーシャル・キャピタルとは何なのか，概念に関する議論も活発に展開されることになる。世界銀行に関与する研究者がまとめた書物のなかでセラゲルディンとグルータルト（Serageldin & Grootaert）は[4]，狭義のソーシャル・キャピタル概念としてパットナムの初期の把握を取りあげ，個人間の関係かつ水平的な関係が中核になっていると指摘している。コールマンの把握においても家族・親族など第一次集団を重視する一方で，第二次集団（社会的なネットワークや市民参加）を軽視する傾向が見られた。パットナムもコールマンものちには企業間関係や垂直的な関係もソーシャル・キャピタルに含めるようになった。また，

3　Halpern（2005），Klages（2000）

4　Dasgupta & Serageldin（2000）に所収の論文。

「強い紐帯」だけでなく「弱い紐帯」[5]も正当に評価されるに至る。そして最も広くソーシャル・キャピタルを理解しているのはオルソンやノースであるとしている。彼らにおいては，社会制度もソーシャル・キャピタルとされる。

ソーシャル・キャピタルの内実は何であるのか？　稲葉陽二氏は信頼，規範，ネットワークの３要素から成るとしており，ハルパーン（Halpern）もネットワーク，規範，制裁の３つが構成要素であるとしている。複数の行動主体間の協調行為や戦略的行為に関しては，経済学において契約論，取引費用論，またゲーム論などにおいて扱われてきており，その局面だけに着目するならば，ソーシャル・キャピタルが特段の重要な「見落とされていた」概念とは言えない。行動主体間の関係に付随する，あるいはそれが生み出す情動的なつながり，規範的な順応といった認知的・情動的要素をどれほど重要で独立した要素とみなすかという問題が認識されたと言えよう。したがって，ソーシャル・キャピタルの定義として「インフォーマルな規範，２人以上からなる個人間での協力関係を促進する規範から，キリスト教や儒教のような確立された宗教的規範まで含む」と理解しているフクヤマ（Fukuyama）の把握はかなり的を得ているのではなかろうか。

一方，リン（Lin）は「人的資本が技術，知識，証明を得るための訓練や実践プログラムへの投資であるのに対し，ソーシャル・キャピタルは他の者がもつ資源へのアクセスや借用を可能たらしめる社会関係への投資」であるとし，「目的的行為によってアクセス・動因される社会構造に埋め込まれた資源」と解釈している[6]。目的的行為とは損失の最小化と獲得の最大化をめざす行為である。ソーシャル・キャピタル論のミクロ理論構築をめざしたこの把握はネットワーク分析に有効なアプローチとなるだろ

5　「弱い紐帯」「強い紐帯」についてはグラノヴェッターの説がいまや古典的なもの。

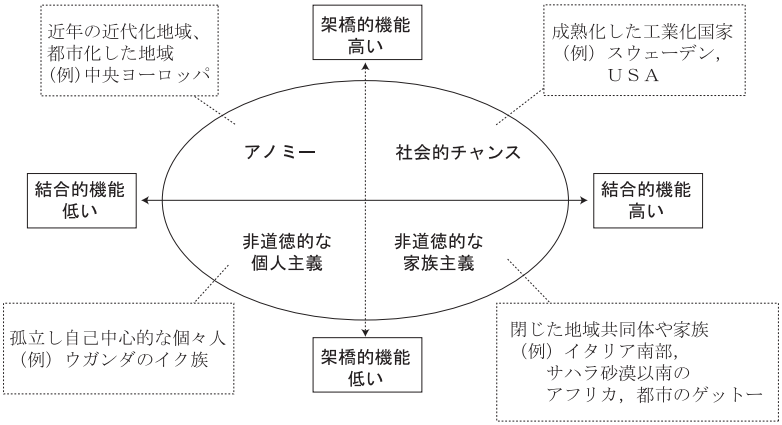
6　Lin（2001）

う。だが，道具的・手段的行為と表出的行為を区分し（およそ行為はこの２つに区分できる），社会関係を含む資源の探求・獲得の動機から道具的行為が発生する一方で，同じく社会関係を含む資源の維持を目的とする行為を表出的行為ととらえている点に疑問が残る。ソーシャル・キャピタルをミクロ領域，マクロ領域の双方に通底する概念と想定し，主にミクロ領域で通用する理論をマクロ領域にも適用するさいには，社会的ルールや規範を維持する行為と表出的行為はどのように関連づけられるのか，またルールや規範の公共性をどうとらえるのかが問題になる。

ソーシャル・キャピタルが果たすプラスの役割だけでなく，ネガティブな効果についてはソーシャル・キャピタル概念が議論される早い段階から認識されており，パットナムがイタリア社会の民主主義の定着度，市民の政治参加度合いを研究したさいの，市民的・共和制的な紐帯への着目において，ともすれば見落とされがちであった側面として，指摘されてきたところであった。これは bonding（結合的効果）と bridging（架橋的効果）として論じられてきた。地縁・血縁的な人間関係はそれに属する人々にとっては，強い帰属感を提供するばかりか，様々な情報や便益も提供する貴重なネットワークであるが，反面それに属さない人々に対して排他的であったり，属するメンバーがネットワークから出ていくことに抵抗を示したりと，社会的にあるいは属する個々人にとってマイナスの効果を持っているのではないか。ギャング団のようなつながりであればネガティブな効果はより明瞭である。この bonding と bridging の効果は個々のネットワークについて分析されるだけでなく，社会の型を分析するさいにも一定の有効性をもっている。ハルパーンはそれを興味深く類型化している（図表２）。

上記において，ソーシャル・キャピタルが経済学者にとって「見落とされた」変数であると受け取られた点を指摘したが，経済行為が社会的な脈絡から独立してはありえず，また分析も不十分なものにならざるを得ないという観点は，いわゆる「埋め込み（embeddedness）」に関する議論としてすでにあった。ウールコック（Woolcock）は，この系譜をレビュー

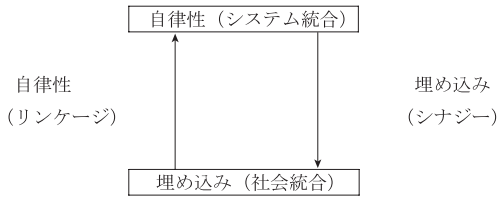
図表２
ソーシャル・キャピタルの「結合的機能」「架橋的機能」と社会類型



Halpern（2005）p.21

しつつソーシャル・キャピタルを論じた論文のなかで，embeddedness に関して，すべての取引は経済的でもあり社会的でもあること，embeddedness は様々な形態をとること，便益の裏側には必ず費用が発生していること等を指摘し，より包括的な分析のためには embeddedness だけでは不十分であると主張する。「ソーシャル・キャピタルが意味ある理論的・経験的概念としてその地位を保つためには，（社会）集団が集合行為において静態的ジレンマを回避するのに役立つだけでなく」動態的な組織的ジ

図表３



Woolcock（1998）を部分的に改変して

レンマを解決するうえで重要な要素となる社会的諸次元のなかに位置づけなければならない，としている（図表３）。

ここには伝統的な社会理論において中心的テーマであった社会統合とシステム統合に関する見取り図のなかにソーシャル・キャピタル概念を位置づけようという意図が見て取れる。市民社会の再生あるいは形成を展望するさい，自発的な結社の豊かな活動，社会関係資本の厚み，公共圏（ハーバーマス）の形成といった要素が不可欠であるが，先進工業国ばかりか中国のように急速な経済発展に継いで市民社会の形成を展望するなかでもソーシャル・キャピタルが注目されるのは，まさに社会構造の全体像のなかにソーシャル・キャピタルを位置づけようという志向が働いている。この点で，信頼に関する議論との関連が注目される。

ソーシャル・キャピタルの指標と測定方法に関する議論と研究も増加傾向にあるが，かなり信頼できる総合的指標は「社会的信頼」であるという理解はかなり支持されている。社会における信頼に関してはWorld Values Surveysのなかの調査項目「ほとんどの人は信頼できますか」のデータが参照されることが多い。たとえば2001～４年の同データ結果によると，スカンジナビア諸国，アジア地域，英米圏，旧ソ連圏，中央・南アメリカ，中央・北アフリカの順で信頼度が高い。信頼とは何かについても議論は一様でない。経済理論をベースにした暗黙の契約と理解するアプローチがある一方で，ルーマンの「社会的複雑性の縮減」という把握を踏まえ総合的に理解しようとするミスタル（Misztal）のようなアプローチがある[7]。ソーシャル・キャピタルとの関連でいえば，顔見知りの比較的狭い，閉じた関係性における信頼，と見知らぬ人との関係性における信頼を区別したうえで，オーハラ（O’hara）が述べるように，たとえばインターネット上での関係のように「水平的」な信頼，と科学や政治の領域におけるように「垂直的」な信頼の区別が重要であるように思われる。後者にお

7　古河（1999），Misztal（1996）など。

いては，前者において前提とされる厳密な意味での互酬性は存在しないのである。むしろ「信託」と訳すほうが適切であるような trust が求められ，問題とされる。信頼を契約をベースにした関係と信託をベースにした関係として理論構築する必要があるのではなかろうか[8]。

政策的適用については，パットナムがソーシャル・キャピタルの再構築をめざす方策を検討するセミナーを開催し（サグロ・セミナーと称されていた），そこにおいて議論されたものが英米圏におけるものとして参考になろう。教育の領域では，学校教育における市民教育やサービス学習，ボランティア活動を大学入試のポイントに加算する方策など。雇用の領域では，従業員が地域共同体の諸活動に参加できるよう，フレキシブル勤務や休暇取得の法制化など。都市計画の領域では，スプロール化現象を改善し通勤時間を短縮する方策や公共空間を創出するデザインなど。技術の領域では，地域共同体への帰属や参加意識を高めるような電子ゲームやコミュニケーション方法の開発など。芸術の領域では市民が広く参加できる文化・芸術活動の提供・組織化など。政治の領域では，市民参加を促すことや選挙キャンペーンにおける資金面での改善策など，である。

ソーシャル・キャピタルは現代社会のきわめて多くの分野に関わり，また人々の人生満足度の重要な要素でもあるため，政策との関連は多岐にわたる。マクロ的にみるとソーシャル・キャピタルは公共財としての性質を有するため，「ただ乗り」と過少投資の可能性がある。基礎教育やインフラストラクチャーのように公共投資の対象として容認度が高いと政策課題になりやすいように，国民の間でソーシャル・キャピタルが公共財として認識されるかどうかが重要なポイントになるだろう。一方，ミクロ（あるいはメゾ）レベルでみると，ソーシャル・キャピタルには「クラブ財」としての性質もある。クラブ財として理解される場合，そもそも政策的働き

8　O'hara（2004），樋口（1999）。なお岩井克人『会社はこれからどうなるのか』平凡社，2003年も，この「信託」概念を社会構成の重要な柱ととらえている。

かけの対象となるのかどうか，どのような根拠があるのか等も含めて議論されることになる。幼年期，少年期の養育・教育においてソーシャル・キャピタルの有無や多寡は，その後の人生チャンスにおいて大きな影響を及ぼすことは様々な研究において広く認識されているところであるが，教育における公平性が政策目標の一つとなっているように，ソーシャル・キャピタルにおける公平性が論点とならざるを得ない。

ソーシャル・キャピタルが減退しつつあるとの判断が大きい英米圏では，政策的対応の必要性が強く意識されている。それゆえ上記「サグロ・セミナー」での議論が示すように，ソーシャル・キャピタルに関連する政策は多岐にわたるものがみられる。しかしパットナムによるイタリアの政治文化の研究を示されたイタリア南部の政策担当者が，「ソーシャル・キャピタルの貧弱さは何百年もの歴史・伝統に由来しているから我々に何ができるのか」と嘆息したと言われているように，そもそも短期的に政策効果が期待できるのかどうかという根源的な問いは残る。

政策的対応はコミュニタリアニズム（communitarianism）の社会展望とずいぶんと重複するところがある。ソーシャル・キャピタルの概念，測定方法，因果関係など議論が尽きない部分も多いが，社会科学諸領域で大きな関心を集めているのは，まさにわれわれが本質的に社会的な存在であり，市民社会の充実（あるいは形成？）というポスト工業化時代の政治・経済の要になるビジョンと不可分であるからである。

【参考文献】

Baron, S., Field, J. & Schuller, T.(eds.), *Social Capital: critical perspectives*, Oxford University Press, 2000

Coleman, J., ‘ Social Capital in the Creation of Human Capital ’, *The American Journal of Sociology*, 94 (1988)

Coleman, J., *Foundations of Social Theory*, The Belknap Press, 1990

Dasgupta, P. & I. Serageldin(eds.), *Social Capital: A Multifaceted Perspective*, The World Bank, 2000

Dhesi, A.S., ‘ Social capital and community development ’, *Community Development Journal*, Vol.35 No.3, 2000

Ezioni, A., *The Spirit of Community*, Fontana, 1993

Field, J., *Social Capital*, Routledge, 2003

Fukuyama, F., ‘ Social capital, civil society and development ’, *Third World Quraterly*, 22/1 (2001)

古河幹夫,「『信頼』の経済学的アプローチの批判的検討」『長崎県立大学論集』第33巻第２号，1999年

Granovetter, M., ‘ The Strength of Weak Ties ’, *American Journal of Sociology*, 78 (1973)

Hall, P.A., ‘ Social Capital in Britain ’, *British Journal of Political Sciece*, Vol.29, No.3, (1999)

Halpern, D., *Social Capital*, Polity, 2005

樋口範雄『フィデュシャリー[信認]の時代』有斐閣，1999年

稲場陽二『ソーシャル・キャピタル』生産性出版，2007年

稲場陽二他『ソーシャル・キャピタルのフロンティア』ミネルヴァ書房，2011年９月７日

稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書，2011年

Klages,H., Engagement und Engagementpotential in Deutschland, Ulrich Beck (ed.), *Die Zukunft von Arbeit und Demokratie*, Suhrkamp, 2000

Lin, N., *Social Capital*, Cambridge University Press, 2001.『ソーシャル・キャピタル』筒井淳也他訳，ミネルヴァ書房，2008年

Lin, N., & B.H.Erickson (eds.), *Social Capital*, Oxford University Press, 2008

宮川公男・大守隆編『ソーシャル･キャピタル』東洋経済新報社，2004年

O’hara, K., *Trust: From Socrates to Spin*, Icon Books, 2004

Misztal, B.A., *Trust in Modern Societies*, Polity Press, 1996

Misztal, B.A., *Informality*, Routledge, 2000

Portes, A., ‘ Social Capital: Its Origins and Applications in Modern Sociology ’, *Annual Review of Sociology*, 24 (1998)

Putnam, R., *Making Democracy Work: civic tradition in modern Italy*, Princeton University Press, 1993.『哲学する民主主義』河田潤一訳，NTT 出版，2001年

Putnam, R., *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster, 2000.『孤独なボウリング』柴内康文訳，柏書房，2006年

Schuller, T., ‘Social and Human Capital: The Search for Appropiate Technomethodology’, *Policy Studies*, 21/1, (2000)

Selznick, P., *The Moral Commonwealth*, University of California Press, 1992

Selznick, P., *The Communitarian Perspective*, Woodrow Wilson Center Press, 2002

Woolcock, ‘Social Capital and Economic Development’, *Theory and Society*, 27/1 (1998)